



見沼たんぼくらのイベント

第5回清掃ボランティア

11月9日(日曜日)に見沼グリーンセンター周辺で清掃活動が実施されました。当日は小雨が降ったり止んだりの天気の中総勢75名の参加者があり、今回は埼玉県庁の入職2年目職員が研修の一環として多数参加してくれました。

清掃は見沼グリーンセンター正門を起点に、全員で風車のある見晴らし公園周辺で活動を行ったあと、見沼たんぼの芝川沿いの神明下橋から石橋までのおよそ1キロを二手に分かれ、空き缶やペットボトルなどの様々な廃棄物の回収を1時間半程行いました。

清掃作業が終わった後、参加者はすがすがしい顔でもどり、記念品の見沼ファーム21が見沼たんぼで生産した新米彩のかがやきとお茶を受け取り帰路に着きました。参加者は「毎回来ているが年々ゴミが減っている気がします。モラルが向上してきているのを感じます。」と中年男性。「若い人と一緒だと活気があっていいですね。是非、見沼たんぼに関心を持ってもらってこの自然が残された広い空間を次世代に繋げて行って欲しいですね。」と初老の女性。研修生の参加者は「芝川沿いはゴミが多かったが、今回は降りて拾いに行くのは危険ということで拾えなかった。悔しい思いが残る」「今回の清掃活動を契機に、ゴミを捨てない意識を醸成する啓発について考え、提案していきたい。」などと感想を語っていました。



(三上 雅央記)

見沼ふれあい農園づくり「秋野菜栽培

秋野菜栽培の第2号地(緑区見沼494・県民公募)は第1回(9月6日)の種蒔きの後、3回の除草・間引き・一部の収穫を実施し、第5回(11月15日)の最終収穫を迎えました。本農園づくりには延べ193グループ、499名(うち子供191名)の応募者の参加があり、これに県担当者・当会役員・会員による事務方を加え総勢575名になりました。作業は第4回雨天のため翌日(11月2日)延期がありましたが、概ね農作業日和の好天に恵られました。



栽培品種は蕪・キャベツ・京菜・小松菜・春菊・大根ですが、最終日の収穫は生育期の短い廿日大根・小松菜は途中収穫で、作付けの大部分を占める蕪・大根などが中心となりました。第5回目は風もなく良好な作業日和となり、参加者は公募グループ47・134名(うち子供57名)、事務方16名と総勢150名となりました。10時から挨拶・作業手順の説明の後収穫作業となりました。作業は、先ず蕪・大根では生育の優れた株から収穫して頂き

次いで、京菜の収穫、更に、春菊は茎先を摘む方式で収穫しました。なお、キャベツの収穫は各株に生育のバラツキがあり当会役員が担当しました。夫々の収穫物は空地に集め、それを参加グループ(含複数家族の場合は別単位)別にほぼ均一に区分けしました。分配に当たり、参加回数が多い順に希望する蕪・大根の山、キャベツを選択して頂き、更に、希望者には京菜・春菊を持ち帰り頂きました。

この秋野菜栽培の事前作業として8月下旬より作業の前日まで8回に亘る畑の除草・耕耘・施肥・畝作り、キャベツ苗の植付けが行われた事を付記します。当日の未収穫作物は次週に登録の社会福祉団体に対し寄贈し収穫を委ねました。

(若野 忠男記)

見沼たんぼくらのイベント

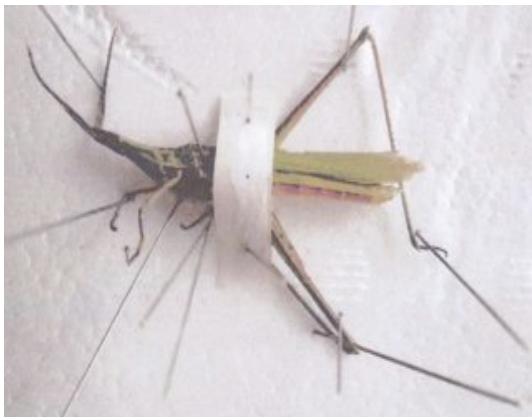
第100回見沼塾『見沼たんぼの昆虫』 講師 牧林 功 氏（埼玉昆虫談話会）

9月20日（土）、見沼グリーンセンターでの講義と野外観察が行われた。

地球上の動物は2／3は昆虫である。

今回は秋の昆虫、特にバッタ・キリギリスを中心に話が進められた。

バッタ・キリギリスの仲間は、後羽の主脈が真直ぐなので、直翅目と言われ、後足が長く跳ね上がるので、昔は跳躍目とも言われた。



見沼たんぼ地域には52種が生息している。

活動形態により、昼活動する種（大きい目で目視）、夜活動する種（触覚で匂いや気配を感知）に分けられる。

音の出し方は、前羽をすったり、足と羽をすったりし、音を感知する場所は種類により異なる。キリギリスは前足のすねの所にあり、バッタは横腹にある。

野外では、クサキリ・ナガバネイナゴ・トノサマバッタ・ショウリョウバッタ・オンブバッタ・エンマコオロギなどを採取した。

再び会議室に戻り、クサキリの標本の作り方指導がなされた。

（長澤 義則記）

第101回見沼塾「見沼たんぼの野鳥」

雨上がりの朝になった。9時大宮公園駅集合の観察会会員23名、一般参加者13名で四班編成となる。

最初のボート池では、キンクロハジロ、カイツブリ、バン、オオバン、カルガモなどがのんびりと泳いでいた。

大宮公園内は地面がすっかり濡れていることもあり、お目当てのビンズイは姿を見せなかった。子供動物園でシラコバトを見たりして、大宮第二公園に向かい、小休止をする。

初めての参加者もいたので、用意してきた野鳥の写真と録音してある野鳥の鳴き声を紹介する。

芝川に出て最初に低木に止まっている、コサギを目にする。スコープで見ると、細かい羽までがよく見えて、その幻想的な姿に感嘆の声。今日のために改造をしたスコープと照準器が成功した



ようである。

高いところには、カラヒワの群れが飛び交っていて、川面には、オナガカモが6、7羽優美な姿を見せていた。

普通なら、常連さんともいえる、ホオジロ、アオジ、カワセミが顔を出すのだが、今回は見られなかった。高木のテッペンにシメがしばらく止まっていた。

鳥の数は20種類までいかなかったが、木の実や落ち葉の観察も出来たし、まずまずの成果であったと思う。

（佐々木 明男記）

見沼たんぼくらのイベント

第 59 回自然観察ハイキング

「綾瀬川低地の自然と史跡を訪ねて」

10月4日（土）秋晴れの観察会日和になった。集会では、自然の豊かさを十分楽しんでくださいと、あいさつがあり、参加者40名を5班編成にして、春野公園を出発。

まず、リーダーから、「歩きながらどんどん隣の人と話してください、脳が活性化しますよ」と



（佐々木明男氏撮影）

の声にメンバーの間に和やかな空気が広がる。

深作川を渡り少し歩くと丸ヶ崎たんぼへ。いきなり水路の両脇に咲くサクラタデの場所に案内してくれた。ほんのりピンク色の花びらが風に揺れて、一帯を華やいだ雰囲気になっている。深作川の水辺にも群落が見られた。

田の畔では、ヒメジソ、ハナイバナ、キンガヤツリ、カゼクサ、ヌカキビなど次々と教えてもらおう。絹織物の黄八丈の草木染めに使うコブナグサも固まって咲いていた。ミニチュアススキとも呼ばれる。

綾瀬川への道をたどると、大豆の原種のツルマメの枝豆状の豆果や粟（アワ）の原種のエノコログサがコース上に点在していた。小豆の原種のヤブツルアズキのササゲ状の豆果も見られ、古い時代から改良を重ねて野菜になった経緯に想いを馳せた。

コースに咲いている草花は生き生きした表情が感じられ、たくさんの草花を紹介されて、綾瀬川低地の自然の魅力を十分堪能した自然観察ハイキングだった。（美原 修記）

見沼ふれあい農園づくり

京芋・里芋・八つ頭・生姜栽培 ③

収穫祭が11月11日（火）に今にも雨が降りそうな曇天のなか緑区見沼の畑で開催されました。見沼たんぼくらぶ会員及び福祉団体の総勢42名の参加がありました。

今年は6月の大雨で生姜は全滅でしたが京芋、里芋、八つ頭は夏の暑い盛りの草取りなどの手入れ作業が功を奏し、立派に育ち大収穫に結び付けることが出来ました。

当日は（社福）ななくさ大谷作業所、（社福）さくら草、（NPO）ともに生きる会さんごの皆さんにも芋掘りに加わっていただき収穫体験を



していただきました。泥だらけになりながら里芋や八つ頭の土をへらなどで落としたりズイキや京芋を一生懸命に運んだりして収穫を楽しんでいました。

なお、収穫祭に先立ち10月27日（月）にためし掘りを実施し出来具合を確認したのですが順調に育っていました。この時に（社福）久美愛園には収穫体験をしていただきました。

参加者は「京芋はしっとりとした味で美味しかったです。里芋と八つ頭の間の中味ですかね。来年も作りたいです。」「京芋も里芋も八つ頭も同じような葉っぱなので区別が付きませでした。教わっても京芋と里芋は難しいですね。」「八つ頭は前年と比べるとだいぶ小さくなってきていますね。連作の影響があるのでしょうか。」などと話していました。

2015年度は里芋・八つ頭等の栽培を別の場所で実施し、この場所には花を植えて景観を楽しんでいただく予定です。（三上 雅央記）

見沼たんぼ水彩スケッチ紀行

絵と解説 八木一郎

土呂・神明社「土呂の大杉の伝説」・・・土呂の字「神明」にあり、「市民の森」の脇を流れる見沼代用水西縁に面し、東側は低地で江戸中期まで見沼が広がっていた。「土呂」の地名は清浄と同じく、静かに水を湛える場所を示す言葉なので、見沼を表現したものという。

本殿西側には「笠伝説」で有名な杉の古木があり、県の天然記念物であったが樹齢尽きて立ち枯れ、昭和 45 年姿を消した。

源義家が杉箸を立てたのが年輪約 800 年の大木になったと伝えられ、画面の社殿塀の下部にその切株跡が確認できる。

天沼・大日堂・・・医大医療センターの西、見沼代用水西縁に面して立地しており、井沢弥惣兵衛為永翁が見沼開削を始めた際に拠点としたところ。

翁が病の床についていた時、娘姿の竜が現れて干拓の中止を訴えたので、人々は竜神のたたりを恐れて 片柳の萬年寺へ移した。鎌倉時代の創建と伝えられ、戦国時代から近世にかけ荒廃したのを江戸時代村の有力者が再建したもの。本堂西側に立つ市内最大の板石塔婆は、鎌倉後期 1276 年（建治 2 年）建立。

フナノで遊ぶ子供たち・・・田圃周辺では昭和 30 年代初めまで作られていた藁塚「フナノ」。主に燃料や家畜の餌に使用されたが、ムシロやカゴなどにも利用された。画面右方の「稲架（ハザ）」や「藁ボッチ」も目的は同じで、これらは「見沼ファーム 2 1」（島田さん代表）が中心となって多くの方々の協力を得て 2012 年秋に復元された。保育園児が暖かい日差しを浴びて、モミガラの上で無心に遊ぶ姿が印象に残った。



見沼たんぼくらぶ
会員作品（俳句）

見沼緑地への讃歌
オマージュ

鎌田正男

葉桜や水の惑星水匂ふ

ふり向けば他人の空似芋嵐
そらにいもあらし

ふくろふのそんな眼をしなくとも
まなこ

田の水のたつぷりとある星祭
ほしまつり

七夕の川面に人の映りけり
かわも うつ

青葦のとなりの葦にささやけり
あおあし あし

大刈田夕日まみれとなりけり
おおかりた

手に受けて月のにほひを持ち帰る

宝石を放りしごとく寒の天
ほう

寒の星相睦み合ふにはあらず
あいむつ

見沼たんぼ探訪記

「さいたま市みどりの祭典」開催される

10月18日と19日の両日、「第11回さいたま市みどりの祭典」が、北区見沼2丁目の市民の森・見沼グリーンセンターで開催された。この祭典は日頃、見沼たんぼで活動する主な団体とさいたま市とが協働して、見沼たんぼの魅力や活動状況をパネルや展示によって広く、市民に紹介することにある。

幸いな事に両日とも秋晴の好天に恵まれ、大勢の人たちが会場に来られ、秋の1日を楽しむ姿が見られた。「見沼たんぼにはこんなにも沢山の自然が残されているのに驚きました」、「ドングリやマツボックリで色々な物を作り、子供に返った思いでした」・・・という声が、それぞれのブースで聞かれました。

会場で熱気球や高所作業車に乗って、上空から見沼たんぼを見下ろしたり、二胡演奏、青空ヨガと健康チェック・・・等々、多彩な催しも行われ、一段と賑やかな祭典となりました。

見沼たんぼは日光の中禅寺湖に匹敵するほどの面積を持つ広大な緑地であり、歴史的に名を成す寺社や史跡もあり、里山を思わせる自然が残さ



れていく所です。コンクリートで造られた建物のジャングルの中で日常過ごしている私たちにとって、見沼たんぼを歩く事により、また、自然や史跡等に触れる事により心を癒され、元気を取り戻せる所となっています。

見沼たんぼに育まれた文化を継承して行こう等々、色々な団体が活動しています。「みどりの祭典」への来訪者に対して、夫々の活動内容を説明・紹介する事に意義があり、見沼たんぼの理解を強めて頂いたのではないかと思います、関係する一員として嬉しく思いました。（召田 紀雄記）

第9回自然観察さいたまフレンド・フェア

NPO法人自然観察さいたまフレンドは、標記フレンド・フェアを9月9日（火）～14日（日）、さいたま市立大宮図書館1階展示ホールに於いてさいたま市教育委員会の後援により開催され



ました。当フレンド・フェアは隔年毎の開催です。会期中の来場者は397名となりました。この中には13日（土）

午後清水勇人市長の来場がありました。来場者は展示された会員の諸作品や当会の活動状況を示すパネルを熱心に見学し、当番担当者と活発な意見交換をする機会も多く見られました。会場には4月に急逝された鳥類に造詣の深い山田泰廣理事を偲ぶコーナーをはじめ、会員11名による39点の四つ切W判やA4判による自然観察時などでの鳥類・昆虫・野草・田園風景などを撮影された写真、及び2名の自然との関わり合いを吟じ色紙・短冊に墨跡鮮やかに書かれた俳句の展示があり、また、本会の活動を記録したパネル（その主なものを示せば、2013年実績を基にした芝川低地のバード・ウォッチング・水質調査・それに付随の植生調査の記録、見沼たんぼの絶滅危種（植物）、見沼たんぼの希少動物・見沼たんぼの外来動・植物のリストなど）、写真集（鳥類・蝶の生態・見沼の野草など）、調査資料など、更に立体作品のとして「見沼たんぼの生き物たち」と題して、カワセミ（手作り模型）が川面を狙っている姿を含めて見沼たんぼの情景を彷彿とさせる作品の展示もあり話題になりました。

当会の主要な活動の場が見沼たんぼ周辺であることから、展示された作品等はこれらの地域を主題とした作品・記録が多く、見沼たんぼを幅広く知る来場者に多く占められたと思われませんが、この地域の持つ魅力を新しい観点から捉える事ができ堪能されたものと考えています。

（若野 忠男記）

見沼たんぼの仲間たちNo.32

影絵 「いろり座」

事はじめ

定年後の自分探しにと、「切り絵」を知り、独学で取組み始めた。間もなく読売文化センターで「影絵・メルヘンの世界」の講座で影絵作家丘光世先生に出会う。間もなく丘先生指導の影絵グループ「虹」に参加、影絵劇の面白さを体験する。

翌年「見沼文化の会 10 周年」イベントで民話作家宮田正治先生に出会い、見沼たんぼの民話に興味を持ち、その場で「見沼文化の会」に入会し宮田先生に師事。こうして＜影絵と見沼の竜＞探究が始まった。

いきがい大学伊奈学園で学ぶ

1 年目の学園祭で演目「ふるさとの詩と影絵の世界」を提案、2 年目の卒業課題で班長となり、テーマ「囲炉裏から生まれたふるさとの原風景」に取り組む。この頃から卒業したら仲間を募って影絵劇団の設立が目標となった。

課題発表会では民話影絵劇「かさじぞう」を演じ、学園交流会事業に推薦の栄を受けた。

影絵「いろり座」設立と旗揚げ公演

卒業時にクラス仲間呼びかけ、影絵劇団「いろり座」設立に動く。趣旨に「ボランティア活動で影絵劇（民話・昔話・童謡唱歌）公演を保育園・小学校・高齢者施設などで行う」とし、仲間 10 人が集まった。

3 月の卒業と同時に、課外学習でお世話になった三芳町立歴史民俗資料館の館長の招きで敷地内の古民家座敷で旗揚げ公演を実現した。

いろり座の活動スタート

4 月、いよいよ活動スタート。毎月 2 回を定例活動日とし秋公演を目指して、宮田先生原作の民話影絵「見沼の竜」の制作に取り掛かる。

4 月から 10 月まで＜脚本→読み合せ→録音→下書き→暗体作り→舞台練習＞と夏休み返上で座員一同制作に没頭した。

「かさじぞう」で一応制作体験をしているとはいえ、皆初めても同然しかも、「見沼の竜」はいきなりの大作で皆汗をかきながらの半年でした。

このときの制作体験がいろり座のチームワークの基盤になっていると思う。脚本が出来あがり、宮田先生に素読みしてもらい、どうですかと恐る恐る（なにせ先生の原作ですから）・・・場面毎の



バランスが長すぎたり、もう少しカットしてもいいかな、80 点かな・・・と仰いました。

地域の保育園・小学校から公演依頼が

2 年目の翌年辰年だったせい？もあり「見沼の竜」公演が増え忙しくなりました。公演希望日と座員の都合を合わせるのが大変です。

3 年目に入る頃には、土曜チャレンジからの依頼もロコミなのか、だんだん増えてきました。

この年は次の民話影絵「ごんぎつね」に取り組み、公演の合間という感じで 1 年かけてようやく完成、4 年目に入りました。この 11 月でいろり座公演回数は 57 回になりました。

また来てね！と言ってもらえる「いろり座」を目指します。

（影絵いろり座座長 高橋 正幸記）

見沼たんぼを支える農家さん

「森田園芸」 森田智之さん

学校や公園、街角などの花壇に植えられているパンジーやビオラ、ナデシコ、ペチュニアやベコニア、マリーゴールドなどなど。森田智之さんは、市内のあちこちで季節ごとに心を和ませてくれるこうした花苗を主に作っています。

11月の末、膝子直売所近くにあるハウスの中では出荷のピークを越えて落ち着いてきたとはいえ、まだまだ色とりどりのパンジーやビオラが柔らかい香りを放っていました。くっきりとした色合いのものから、ほんのりとそこはかとない柔らかい色彩のものまで、様々な色やグラデーションの小さなかわいい花たち。直売もしています。



(森田智之さん)

花壇の植え替えは年に2回。6月と11月が中心となります。この時期には市内あちこちに散らばる植え込み場所に、植え込みを担当する団体の希望の時間に合わせて花の苗を届けます。各シーズンにそれぞれ10万ポットほどの苗を納める、と聞いて、あまりの数の多さにちょっと想像がつかせませんでした。この時期は配達で運んでこ舞いの忙しさというお話に、思わず深く頷きました。

注文に合わせた色と数を揃える、と一言で言ってしまうとそれだけですが、実際に注文がまとまるのは、秋ならば10月半ば頃。つまり、苗の準備をする時期には決まっていないのです。だから、種をまいたり苗を植えたりする時は、それまでの経験と見通しから推し測って色や種類を決めます。

小学生の頃からごく自然に、農業を継ぐ、と思っていたという森田さん。花をつくることは楽し

いし、野菜と同じように花にも地産地消があっているのではないかと、さいたまの花でさいたまを飾れたら、と思いを語ってくれました。元々は米と切り花用の花を作っていましたが、智之さんが高校生の頃から花を専門に作るようになって25年ほど経ちます。でも、今の農業の現状を考えると、ここで農業を続けられるのか、子供に継がせていいのか、と考えることが多いそうです。



(ハウスの中の花苗)

花、というとなんか私たちがつい花そのものにばかり目が行きがちですが、小さかった蕾が次第にふくらんで、ゆるやかにほどけていくさまや、花を支えている葉の色合いなどにもちょっと目を向けてみるとおもしろいですよ、と教えてくれました。また、小さい時から花に興味を持ってもらえればと、小学校の社会科見学の受け入れや、「花いっぱい運動」「一人一鉢運動」などにも協力しています。

長身の森田さんが小さなパンジー達に囲まれている姿は、なんだか花のお父さんのよう。時々、急には対応できない無理な注文があったりするそうです。でもね、花には育つ時間が必要ですからね、と穏やかに語る森田さんのお話を聞いているうちに、「^{はぐ}む」という言葉が浮かんできました。育むためには、それ相応の時間が必要です。すぐに結果ばかりを求めたがる今の私たちの生活。「花の時間」を大切にしたいと思いました。

(取材：島田・高橋 記)

森田園芸 : 見沼区膝子 586

Tel 048-683-0863

見沼たんぼくらのイベント案内

第60回自然観察ハイキング 見沼の自然と史跡を訪ねて

[圓蔵院のシダレザクラと上山口新田の野の花]

日時：3月19日（木）9時～12時

集合：JRさいたま新都心駅改札口向側

■ 自然観察指導員のガイドで、史跡を巡りながら、春の花を楽しく学びます。

コース：さいたま新都心駅⇒ケヤキ広場……

見沼代用水西縁……大宮南部浄化センターWC（みぬま見聞館&自然庭園）……上山口新田……圓蔵院……中山神社

申込み：当日、集合地で8時30分から受付

参加費：¥500（ただし、会員及び中学生以下は無料）

会員の主宰するイベント情報

第228回見沼ぶらり・おもしろ自然観察

《冬の自然観察入門》

日時：1月18日（日）9時30分～12時

集合：大宮第二公園南管理棟

主催：NPO法人自然観察さいたまフレンド

■ テーマ別のグループに分かれて、自然観察指導員がガイドを務めます。

① 初心者向きの野鳥観察 佐々木明男指導員

② よく分かる冬芽観察 五十嵐 力指導員

③ 野草の越冬スタイル観察 若野 忠男指導員

申込み：当日、集合地で9時から受付

参加費：¥500（ただし、主催団体会員及び中学生以下は無料）

交通：大宮駅東口からバス⑧「芝川」下車、北側（バスを降りて左側）

大宮発 8：15，35，55（10分～15

見沼スケッチ会 第8回水彩画展

日時：2月24日（火）～3月1日（日）

9時30分～17時（ただし、初日は12時から、最終日は15時まで）

会場：さいたま市 氷川の杜文化館
（氷川参道東側 TEL(048)648-1177）

■ 「見沼スケッチ会」は「旧坂東家住宅見沼

くらしっく館」を拠点として、毎月第1火曜日に見沼の風景を主なモチーフに水彩画を勉強している同好者の会です。

問合せ：主宰 八木一郎 TEL(048)822-5504

たんぼくらぶ入会を勧めます！

見沼たんぼをもっと知りたい

見沼たんぼの自然にふれてみたい

見沼たんぼで何かしたい

見沼たんぼの保全に協力したい

そんな皆さまをお待ちしています！

■ 季刊『みぬま通信』をお届けします。

4月・7月・10月・1月発行

■ 埼玉県土地水政策課の支援のもとに、見沼たんぼ地域で様々な活動を展開しています。

子どもから年寄まで気軽に楽しめるイベントです。

○…見沼ふれあい農園づくり

農地はスタッフが耕運し、畝づくりを済ませ、種蒔き・植付から除草、収穫までの作業です。

収穫物は福祉施設にも寄贈しています。

○…自然観察ハイキング

『見沼の自然と史跡を訪ねて』

○…見沼たんぼ清掃ボランティア

○…斜面林の体験学習

○…見沼塾—見沼の自然と文化を学ぶ講座

■ 年会費 個人（同居の家族単位）・団体・企業とも1口¥1,000（団体・企業は3口以上）

みぬま通信第61号

発行日 平成27年月1月1日

発行所 見沼たんぼくらぶ

〒337-0053 さいたま市見沼区大和田町

1-2124-3 小野方

TEL・FAX (048) 683-1764

E-mail t.ono@axel.ocn.ne.jp

URL <http://minumatanbo.web.fc2.com/>

© 2015 Minuma Tuusin